平成17年度第４回郷土研究講座

平成18年2月24日（金）
佐賀県立図書館大会議室

佐賀錦 － 伝承の形 －

講師　佐賀錦作家　**井手美弥子**（いでみやこ）さん

第４回郷土研究講座では、「世界的にも非常に珍しい織物である」佐賀錦の指導・研究や情報発信に熱心に取り組まれている井手美弥子さんから佐賀錦を伝承することの意義と大切さを話していただきました。お話のあと、作品の解説や実際の織りが披露されました。なお、ここでは技術的なお話については割愛させていただきました。

１　佐賀錦のはじまり

よく、網代組（あじろくみ）が佐賀錦の原型になったといわれますが、京都あたりの「紙遊び」がもとになって生まれたのではないでしょうか。紙と紙を組んでいくと、いわゆる佐賀錦の文様になっていきます。それが、次第に経糸（たていと）も緯糸（よこいと）も紙だけというのに物足りなくなり、紙の経糸に木綿糸の緯糸を入れていくことで佐賀錦の原型みたいなものができたと考えています。江戸時代末の鹿島藩においてそれに創意工夫が加えられた結果、現在の佐賀錦と称されるものになったのでしょう。

２　佐賀錦の歴史とイメージ

明治時代になり、東京の鍋島家を中心として一條家や毛利家などの華族による佐賀錦のサークルができてきます。そして、よく知られているように大隈重信が愛好し、佐賀錦が大いに広まっていきます。ただし、この絢爛豪華な、そして希少価値の高い織物は、「生活必需品」としてではなく「嗜好品」として愛好されてきました。また、織る作業に忍耐を要することから、「躾（しつけ）」として習うこともあったようです。

佐賀錦は、大正・昭和とその後も高い知名度と高級なイメージで人気をえていきますが、実際の佐賀錦は古い伝統を継承した織り模様で織られたものであり、その製作には多くの時間と忍耐を必要とします。このため、「本物」が市場に出回ることは少なく、「機械織り佐賀錦」が市場にあふれることになり、本当の佐賀錦と市場の佐賀錦とのあいだに混乱が生まれてしまいました。

３　佐賀錦の課題と今後

わたしたちの生活の変化によって和装の機会が減少し、佐賀錦で作られた伝統的な作品を身につけることが少なくなりました。このため、織り上げた「裂地」で何を作るのかという問題もあります。最近、木目込人形に着せるということもやっていますが、これも時代の流れだと思います。しかし、地場産業として佐賀錦と企業が結びつくことには疑問があります。

佐賀錦は、「世界的にも非常に珍しい織物」であり「佐賀県の誇るべき織物」です。佐賀錦は有田焼のように中国など外国の影響を受けていない、佐賀独特の工芸品としての織物ではないかということが、アメリカの論文で指摘されています。

そのような、世界に誇れる佐賀錦をただひたすら手で一つ一つ織り続けてきた先駆者たちの誇りと愛着、そして佐賀錦の魅力を継承し、若い世代へ伝えていきたいと思います。

（文責：佐賀県立図書館）